
タダの魔王様

ユーリG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タダの魔王様

【Nコード】

N8180U

【作者名】

ユージ

【あらすじ】

テキストウにダンジョンを作ったり、魔物たちと遊んだり。

3食おやつ付きのゆる〜い魔王様生活。

たちの悪いクレーマーの如き勇者を笑顔であしらい、平和主義者故に圧倒的な力を持っていても宝の持ち腐れ状態。

そんな新米魔王様（女）の奮闘記。

01：魔王様とダンジョン作り

眩しい夏の日差し。さわやかな草のにおいの混じる風。そして鳥のさえずり。

の、まったく届かない陰気な塔にて。

最上階にある執務室では、魔王様が今日も職務に励んでおられます。

「さあ魔王様。今日こそダンジョン作りを終えてくださいね」

「えーもうあれでいいんじゃない？」

「たった地下2階しかないダンジョンなんて、子供でも攻略できますー！」

「遊び感覚で入ってもらったらいんじゃない？」

「遊びでダンジョン作る魔王がどこにいます！カーツ！」

「まあまあ」

「もう少しまじめにやって下さい。よよよ」

「おお。泣き落とし」

ダンジョンが完成する日は遠いようです。

01：魔王様とダンジョン作り（後書き）

すみません。

初っ端から季節間違えてました。

書き直しました。

02：魔王様とダンジョン作り 宝箱編

魔王様は今日も職務に励んでおられます。

前回、地下2階のダンジョンにケチつけられた為、仕方ないのもう少し難易度を上げようと頑張っておられます。

が、どうやら難航しているようです。

「ていうか、何階まで作ればいいの？」

「それはもう、深ければ深いだけ」

「あんまり深くても、途中で飽きられるんじゃない？」

「いいえ！愚かな勇者どもは、ダンジョン攻略に命を懸けておりますゆえ！うんと難易度をあげるがよろしいかと！」

「あーまさに命がけだね、ほんと」

「・・・それはそうと魔王様。机の上にございますこの空箱は、どうなさるおつもりで？宝箱型のモンスターでも生み出すご予定でございませうか？」

「え？これ？回復アイテム入れてダンジョンに設置す」

「なんですとおおお！？敵に情けをかけるとは何事ですか！カーッ！」

「だってダンジョンの定番じゃん」

「”定番じゃん”ではありません！倒す相手を回復してどうするんですか！」

「じゃあ伝説の武器」

「もつと駄目です！今すぐ！今すぐモンスターに変更なさってください！」

「えー」

「なんですか、その不満そうなお顔は！」

「でももう、五個も設置しちゃったよ」

「ノオオオオオオオオオ！」

魔王様の半分以上は優しさでできているようです。

03：魔王様とダンジョン作り モンスター編

6個目の宝箱設置を阻まれた魔王様は、ふくれっ面で机をバシンバシン叩いていらっしやいます。

よほどおもしろくないご様子。

でもあまり叩きすぎますと、御手が赤くなりますよ。

・・・

ああ、うっかり指を角にぶつけたんですね。

魔王様は悶え苦しんでいらっしやいます。

「いたい」

「知りませんよ。魔王様が勝手にぶつけたのでしょう」

「ひどい！（ガーン）」

「今どき効果音でガーンを使う人（？）は、あなた様くらいでしょ
うね」

「ていうかぶつただけでこれだけ痛いんだから、うっかり剣で斬
られちゃったらモンスター達がかわいそうだよ」

「魔王様。なんとお優しい（じーん）」

「いや、じーんも使う人（？）いないと思うよ」

「せっかくの感動を台無しにしないで下さい」

「てなわけで、モンスターは配置しなくていいかな？」

「ジーザス！！」

「いやそれ、人間の神様じゃん」

「なにをトンチンカンなことを仰っているのですか！カーツ！」

「トンチンカンはそっちの方じゃ・・・」

「モンスターのいないダンジョンなんて、肉じゃがに肉の無いよう
なものです！許しがたい行為です！」

「え！？食べたことあるんだ、肉じゃが（の、肉無し）！」

「とにかく！モンスターは必ず配置させてください」

「ねえ！肉じゃがってこっちにもあるの！食べたい！」

「（無視）モンスターは、先日新たに誕生したゴーレムがよろしいかと。それと先ほど没収した空箱もモンスターにしていまいます」
「う」

「肉ーじゃがー」

「（無視）あとはアンデット系をいくつか呼んで、ラスボスは二丁目の空き地に住んでいるドラゴン兄弟にしましょう」

「肉ーじゃが！」

「（無視）仕上げて魔王様の魔力でパワーアップさせれば、勇者にも負けません」

「肉じゃが、食べたいッ！」

「少しは真剣にお考え下さい！！」

魔王様の”肉じゃが食べたい病”は末期のようです。

04：魔王様とダンジョン作り 冒険の記録編

魔王様はいま、歴代の魔王様が遺された書物をお読みになりながら、何やら思案顔。

お読みになっている書物は、第66代魔王様が執筆なさった『まじく真暗草子のそつし』のようですが。

おや。何やらあからさまに「しまった！」というお顔に。何ぞお忘れになっていたことでもあったのでしょうか？

「セーブポイントつくってなかった!!」

「いいませんよそんなモノ!!」

ダンジョンに入る前に、きちんと記録セーブしておいて下さいね。

05：魔王様と履歴書

履歴書 2011年7月12日作成

氏名： 佐東良子さとうりょうこ

1988年2月29日生（満23歳）女

（地球）

住所 〒123-4567 北海道札幌市中央区 88丁目5

96-3

電話 011-3274

（現在）

住所 魔大陸 魔王の城 最上階/100階

連絡先 魔王の水晶

学歴

平成15年3月 中学校卒業

平成18年3月 高等学校卒業

平成20年9月 アメリカ 大学留学

平成23年6月 異世界へ留学（？）

職歴

平成18年3月 ホテルにアルバイトとして入社

平成20年8月 退社

平成23年6月 魔王として異世界へ就職

資格

実用英語技能検定 準1級

実用フランス語技能検定 4級

普通自動車免許 オートマ限定

「魔王様、何を書いてらっしゃるのです？」

「うーん。履歴書？」

「り、履歴書！？」

「うん。いやー我ながら、なかなかの経歴だね」

「ままままさか魔王様。転職なさるおつもりで！？」

「したいね、転職。勇者あたりに」

「ノオオオオオオ！よりによつて勇者！？性懲りも無く我らに齒向かう、あんな低脳なモノになりたいと仰るか！」

「あ、魔術師も捨てがたい」

「まじゆつし！！我ら魔族が生み出した偉大なる魔の力を使う、あんな盗っ人になりたいと仰るか！」

「いいなー冒険」

「冒険に憧れてないで、中途半端なダンジョンを仕上げて下さい！」

「聖剣とか持ってやりたいね。魔王退治」

「魔王はあなた様です！！！！」

「ていうか、私の名前”よいこ良子”なのに、魔王とかありえないよね」

「・・・魔王様。よよよ」

「おお。泣き落とし、再び」

ところで魔王様。

あのダンジョン、まだ完成していなかったのですね。

06：魔王様と履歴書 留学編

魔王様の書かれた履歴書は、異国・・・いえ、異世界の文字の為、私には読むことができません。

しかしそこに書かれているものを聞いてみると、どうやら魔王様は他国に留学経験がおりだとか。なるほど。博識なのも頷けます。

さすがは我らの魔王様。その勤勉ぶりに頭が下がる思いでございます。

「魔王様。」あめりか”とやらには、どのようなモンスターが生息しているのでしょうか？」

「（モンスターって）そうだな。」

「（わくわく）」

「私が知っているのは、クモの糸を自由に操れるクモ男とか、暗黒面に身を委ねて闇の力を振るっていた黒ずくめの男とか、夜の街中を飛び回るコウモリ男・・・とか？」

「おお。すばらしい！異世界のモンスターも、日々人間どもに恐怖を与えているんですね。」

「あー・・・うん。」

「いやはや、すばらしいことです。実は私も、少々留学経験がございまして。」

「え？アメリカに？」

「いいえ。私は異世界わたくしに行けませんので。」

「じゃあどこ？この大陸に他の国なんてないよね？（私がキング・オブ・魔族なくらいだし）」

「実は、人間どもの国でございます。」

「へー（人間嫌いなのに）」

「敵情視察もかねて、人間どもの暮らしを体験してきたのですが、

これがまた酷いのなんのって」

「はあ・・・」

「私^{わたくし}、魔石の加工には少々自信がありますので、その技術を生かしてアクセサリーの加工をしていたのですが、なぜか人間の女どもがこぞって職場に押し付けてきました」

「はあ・・・」

「私^{わたくし}が作業をしている間も、売り子をしている時も、常につきまわって甲高い声で話しかけてくるのです」

「・・・」

「それだけならまだしも、ある時などいきなり眠り薬で眠らされて、その間に屋敷の一室に監禁されたこともありました」

「いや、それって私の片腕としてどうなの？」

「私^{わたくし}にとって人間どもの屋敷から脱出するなど朝飯前でございますから、その時はすぐさまこちらに戻ってきましたが」

「一服盛られたくせに」

「まったく恐ろしい所でございます、人間どもの世界というものは「ていうか留学って言わないじゃん」」

チャララ〜ン！魔王様のツッコミレベルがあがった。

07：魔王様と履歴書 住所編

魔王様がこの地においでになられる前。

異世界でお過ごしになられていた時、”にほん”という国の”ほっかいどう”なるところで暮らされていたそう。その地は冬に大雪が降り、夏はそこそこ暑く、食べ物も水も美味しい土地だとか。

「魔王様。 ”さっぽろ”という土地には、どのようなモンスター

「時計台やテレビ塔が有名な。冬の雪祭りでは、大きい雪像は見物だし」

「魔王様。 モンス

「でもねー冬は除雪が大変なんだよねー。 スリップするから車の運転も怖いしー」

「モン

「ていうか、ここの住所ってどうやって記入すればいいの？」 魔王大陸 魔王の城 最上階”で手紙が届くと思う？連絡先も”魔王の水晶”じゃあ、面接に合格しても連絡こないんじゃない？」

「って、まだ転職をお考えなのですか！？」

「だいたい、100階建ての城・・・というか塔？の最上階まで配達してくれる人なんて、普通じゃないよねー」

「当たり前です！人間なんて、侵入させません！」

「エレベーターが無いのって、不便だねー」

でも魔王様が階段を使われたところは、一度も見たことがありません。

08：魔王様と妄想

魔王様がこちらにいらっしやってから、早ひと月。

”光陰矢のごとし”とはよく言ったものです。

玉座で焼き菓子をお召し上がりしている姿など、まったくひと月前には想像もできなかったことでございます。

「いやー我ながら、この順応性には恐れ入るね」

「私は、ひと月前のあのおとなしい魔王様が、何故か恋しゅうございます」

「この椅子でお菓子を食べるなんて、できなかったもんね」

「私も、玉座で焼き菓子をお召し上がりになる魔王様など、聞いたことありません」

「でもねーここに来たときは、ほんとびっくりしたよ。うん」

「ああ・・・魔方阵のまばゆい光の中に降り立つ、凜々しいお姿。

漆黒の髪と瞳は畏怖の念を抱かせ、歴代の魔王様をはるかに凌ぐ魔力は、上級モンスターでさえ近づけぬほど圧倒的・・・」

「え。ちよつと、いきなり回想シーン？」

「その強大な魔力を前に恐れ戦き、言葉を発することのできない私わたくしに、魔王様は絶対的な支配者の口調でお告げになられました。『よくぞ余を呼び戻してくれた。お前たちに会えて嬉しく思う』と、もつたいたなくもそのように仰られて・・・」

「いやいや。お箸とごはん茶碗を持ったまま呼び出されたから、フリーズしてたし」

「私わたくしはそのお美しいお姿と魔力に魅了され、自然と叩頭しておりました」

「いやいや。思いつきりドン引きしてたじゃん」

「そして恐れ多くも、魔王様は私の肩わたくしに手を置かれ、『お前たちには苦勞をかけたな』と仰せられました！」

「いやいや。第一声は”おかわり”だった」

「そして魔王様は　　！」

「いいかげんにしろー！この妄想族め！」

魔王様の強大な魔力で、扉が吹っ飛びました。

09：魔王様と愉快的仲間たち

魔王様がこちらにいらっしやっってから、ひと月。

魔王様も、こちらの生活にずいぶん馴染まれたようでございます。

初めのうちは、我々に敬語で話されていたのに、今ではすっかりタメ口で寛いだご様子。

そう。何度も”敬語はおやめください”と申し上げても、しばらくはどこか余所余所しくて。そんなお姿に、我々も少々寂しい思いをしていたものです。

「魔王^{わたし}の片腕。名前はまだ無い」

「いやありますよ。フォルカーでございます。初めにお会いしたときに、申し上げましたでしょう」

「髪も目もダークグレー。彫が深くて鼻が高くて……西洋人っぽい顔つきだね。肌の色はいいかんじにこげ色」

「なんですか、こげ色って。褐色ですよ褐色」

「真っ黒のローブで全身を覆っているので暑苦しい」

「暑苦しいとはなんです！」

「夏なのにありえない」

「カーツ！」

「ローブの隙間からチラ見える服は、やっぱり黒。どう考えても暑苦しい」

「魔王様！あんまりです！」

「身長は180？190？とりあえずデカイ。切れ長の目が伶俐な印象を与えているが、ただそれは口を閉じてるときのみ有効。黙っていたらイケメンでしょう。初めて会ったとき、うっかりときめいてしまったあの時の自分を取り合えずぶん殴りたい」

「……魔王様（しくしく）」

「そしてよく泣く」

「（しくしく）」

「ところで、いつも側にいてナレーターをしている、もう一匹の・
・柴犬？まめ？」

「魔王様の護衛でございます。ちなみに私は魔獣です」

「うっそだー柴犬だよー日本ではそう言う！」

「（コホン）魔王様。この者の愛らしい姿に惑わされてはなりません。この者は元は玉座の間の番人をしておりました、トップクラスの実力を持つ魔獣でございます」

「名を、ケルベロスと申します」

「首、ひとつだけど？」

「ふたつも三つもあったら恐ろしいでしょう。何を仰っているのです」

「（あれ？ここって魔物の巣窟だよな？）」

「私の真の姿の方は、おそらく魔王様のご想像なさっているような、魔獣らしい姿かと」

「お！それは仮の姿なの！見てみたいねー真の姿！」

「お望みとあれば」

「やたー！」

B O N

「ただおつきくなっただけじゃん！」

魔王様のご期待に添えなかったようです。

10：魔王様と魔法の鏡

いま魔王様は、初代魔王様がお創りになった魔法の鏡をご覧になってらっしゃいます。

それは、遠くのもの映し出す、千里眼の力を宿す魔法の鏡。魔王様にしか扱えぬものでございます。

魔王様は好奇心いっぱいのお顔で、魔王様の身の丈ほどある鏡を眺めてらっしゃいます。

「ケロ。これ、どうやって映すの?」

「・・・ケロとは、私のことでございますか?」

「うん。ケルベロスのケロ」

「然様でございましたか(カエルのようだ)」

「ケロケロッ」

「・・・」

「で、使い方は?」

「・・・魔王様ほどの魔力でしたら、ただ念じていただくだけで、遙か彼方のあらゆるものが映りましょう」

「おお!」

「映したいものの名前や姿など、思い浮かべてください」

「よし・・・(むむむ)」

「きゃーッ!!」

「・・・」

「・・・」

「な、なんだいまの?」

「魔王様。いったい何を念じたのです?」

「いや、わざわざ有給とってるフォルカーが、何をしてるか覗き見

しようと思つて……」

「念じられたのですね？」

「だってまさか……まさか……まさか……入浴中だなんて!!!!しかもシャワーキャップ!?あの面にシャワーキャップかよって!!!!)しかもキャーッつて)」

「あの方は有給を使ってまで、いったい何をなさっているのか……」

「

「アヒル隊長いたね」

「バブルバスでした」

「なにあれ自宅?フォルカーってどこに住んでるの?」

「この塔の95階でございます」

「まじでか」

「あれでも一応、魔王様の右腕でございますので、一番側近くにいますので……」

「あれで大丈夫?右腕、変えたほうが良くね?」

「……」

コメントは控えさせていただきます。

10：魔王様と魔法の鏡（後書き）

漢字間違っていたので直しました。

11：魔王様と魔法の鏡 どこかの王様編

先ほどのフォルカー様がよほど衝撃的でしたのか、魔王様は魔法の鏡を見つめたまま微動だにしません。でも確かに、フォルカー様との付き合いの長い私ですら、あの光景を見た瞬間に強力な石化の魔法を受けたようでした。

日の浅い魔王様でしたら、驚かれるのも無理はないかと。

「ケロ」

「いかなさいましたか？」

「これ、映し出すだけじゃないの？」

「通常はそうでございます。ただ、この大陸にある鏡という鏡は、魔王様のこの鏡と通じておりますゆえ、先ほどのような現象が起こったものかと」

「そうなの？」

「はい。有事の際、魔王様のご命令を各地に伝えるための、手段のひとつでございます」

「なるほどねーじゃあ、ふつうは向こうから見えないんだ」

「はい。此度は、魔王様の魔力コントロールが不安定だったのと、たまたまフォルカー様の・・・あー・・・浴室に鏡があった為、あちらからも私たちの様子が見えたものと思います」

「あーなるなる」

「集中して、念じてください。魔王様でしたら、すぐに使いこなせます」

「よっし！じゃあ次は、一番近い国の偵察、だッ！」

「さすがは魔王様。他国の情勢を把握なさるのは、良い心がけかと思えます」

「まあただ見てみたいだけなんだけどねー。ところで王様の名前は？」

「ベルンハルト・ディートリッヒがよろしいかと。ワイゲルト国の王でございます」

「よっしゃ！じゃあいくぜ！ベルンハ……ルト？ディー……トリヒ？」

「魔王様。疑問系はまずいと思います。しかも間違えてます」
「だいじょーぶ。……ほら！何か映りだし……」

「お初にお目にかかります、魔王様」
「誰だキサマ……！！」

「魔王様。失礼ながら、あれは」
「ベルなんとか王でないことはわかる！わかる、わかるよ！いくらなんでもわかるよケロ！」

「失礼しました」

「ていうか、あれ何！？イカ！？イカに顔あつたよ！」

「キザつたらしい顔をしていました」

「なんかキラキラ光ってたよ！」

「ホタルイカでしょう」

「え？ホタルイカ？（ホタルイカじゃないの？）」

「はい。大陸の南の海域に生息する、魔大陸一有名な海産物です。イカの中の王様と言われておりまして、焼いて食べると美味しゅうございます」

「食べるの！？」

「おや。昨夜のディナーにもございましたか？」

「のおおお……！！」

今度は塩辛で食べたいと仰ってましたよ。

12：魔王様と魔王の城

昨日のこともあり、どこか落ち着かない様子なのはフォルカー様。魔王様はいつもと変わりなく振舞いつつも、笑いを抑えるのに必死な様子です。

「やあ。おは・・・ぶふ！おはよう、フォルカー」

「・・・魔王様におかれましては、本日もご機嫌麗しゅう」

「うん。今日も絶好調・・・ぶふふ！」

「・・・本日は、魔王様にもっと我々のことを理解していただくとうと思ひまして、まずは城の中をご案内させていただきます」

「り、りかいね。ぶふっ」

「然様でございます。一度にご案内はできませんので、まずは上から順に90階までご案内します」

「あ、95階はもういいよ・・・ぶはっ！」

「そうでございますようね！」

「ぶぶ・・・そ、そのうち、アヒル隊長を紹介してね・・・！ぶはっ！」

「笑いたければお笑いになるがよろしい！カーッ！」

「ぶはーははっ！」

チャララ〜ン！

魔王様のレベルが上がった！

必殺技”フォルカー様をからかう”を覚えた！

13：魔王様と勇者

突然ですが、勇者が攻めて来ました。
報せを持ってきたのは、ひよこ族の族長でございました。

「魔王様！勇者が攻めてきましたワン！」

「ワン！？ひよこなのは何故にワン！？」

「問題はそこではございません！カーツ！」

「名前がポチだからで御座います」

「あーなるなる」

「何故それで納得なさるのです！？」

「いや、ポチって名前じゃあしょうがないかと」

「ひよこでありながらハートが犬とは、素晴らしいことです」

「ケルベロス！お前も魔王様に付き合わなくてよろしい！」

「「えー」」

「魔王様！ケルベロス！」

「………ワン」

そういえば勇者が攻めてきたのでしたか？

14：魔王様と勇者 囚われのお姫様編

今回攻めてきた勇者一行は、勇者（男）・魔術師（男）・僧侶（女）の、いかにもよくある三人パーティーでございます。

これからどうやって勇者を撃退するか、その対策会議を始めようとしたときでございます。初めての勇者一行に興味津々でした魔王様が、突然「オーマイガーツ！」とほぼ奇声に近い絶叫をあげられ、打ちひしがれた様子で仰け反りました。

「お姫様、誘拐してない！」

「誘拐してどうするんですか！」

魔王様のこだわりは、少々理解しかねます。

15：魔王様と勇者 暴君編

「ごちゃごちゃ考えるのはやめだ！いくぜヤロウども！！」

と、男気溢れる号令で颯爽と執務室を出ようとなさる魔王様。

はたして私がお仕えしている方は、女なのか男なのか。

慌てて魔王様をお止めしようと、フォルカー様がお声をあげました。

「お待ちください魔王様！」

「そこをどけ、フォルカー！」

「いいえ。そのご命令は承伏できません」

「余がどけと言っておる！」

「いいえ！致しかねます！」

お二人とも、妙な小芝居がかかっているような気がしなくてもないですが……。

とにもかくにも。魔王様は扉の前に立ちふさがっているフォルカー様を睨み付け、威圧するように一歩近づかれました。

「魔王様！勇者がどこにいるかご存知ないでしょう！？」

「アイヤー！」

「迷子になるのが目に見えているのに、お通しするわけにはいきません！」

主と上司の様子に、一抹の不安を覚えました。

15：魔王様と勇者 暴君編（後書き）

なんだかんだで、もう15話。

はやいものです。

アイヤー

16：魔王様と勇者 第一印象編

魔王様はたいそうワクワクなさっているのか、興奮を抑えられない様子で勇者一行を見下ろしていらつしやいます。

そう。今まさに目の前にいるのは、我々の天敵である勇者一行でございます。

本来なら魔王様にご足労頂かなくとも、この程度の勇者ならば中級モンスターで十分足りるのですが、魔王様がどうしてもご自分の目で勇者一行を見たいと仰った為、こうして直々にお相手なさっている次第でございます。

魔王様のお供として、護衛役のフォルカー様と私、それから案内役のポチと、ここまで我々を運んだ（まだダンジョンに派遣されていなかった）二丁目の空き地のドラゴン兄弟がお側にあります。

実際、護衛は私だけで十分だったのですが、従者は多いに越したことはないのです。

魔王様はドラゴン（兄）の頭の上に乗ったまま、にっこりと微笑まれました。

「ども。まおうです。就任1カ月目の若輩者ですが、どうぞよろしく」

「まままま魔王様！勇者に挨拶をするとは何事ですか！カーッ！」

「いやー最初が肝心だと思って。面接は第一印象で決まるんだよ」

「目の前にいるのは面接官ではなく、天敵の勇者でございます！」

「えー」

「なんですか、その不満そうなお顔は！！」

でも魔王様。その挨拶では内定は取れませんよ。

16：魔王様と勇者 第一印象編（後書き）

勇者がまだひと言も発していないという事実。

17：魔王様と勇者 時代遅れ編

魔王様とフォルカー様のやりとりに呆気にとられていた勇者が、気を取り直して鞘から剣を引き抜きました。それに倣って、魔術使いと僧侶も各々の武器を構え始めました。

「魔王はどこだ！」

「いや目の前にいますって」

「バルヒエツト魔王は熊のような大男のはずだ！」

「まじで！？そんな噂流れてるの！」

「いえ魔王様。それは先代様でございます。ルディ・バルヒエツト魔王様」

「あーなるなる。 だそうだよ、勇者様。ちなみに私は119

2代目の魔王だったかな。いいくに作るう鎌倉幕府ってね」

「で、では先代魔王はどうした！？他の勇者が倒したのか！」

「倒されちゃったの？フォル？」

「・・・いえ。お正月に餅を喉に詰まらせて、そのまま・・・（ぐすっ）」

「餅に倒されたの！？」

「ああ・・・いま思い出しても、悲しゅうございます」

「・・・だそうだよ、勇者様。いろんな意味でごめんね」

「う・・・うそだ！魔王が餅を喉に詰まらせてたくらいで死ぬか！」

「でも事実だし」

「ええい！本物の魔王をだせ！」

「乗り遅れていますよ、勇者様。時代は熊魔王ではなく、良い子の魔王様です！」

「そんな魔王がいてたまるかー！！」

時代遅れの勇者も、聞いたことありませんけど。

18：魔王様と勇者 蛮行編

先代のルディ・バルヒェット魔王様は、熊のように力強く、筋骨隆々のお方でございました。

先代様は勇者イジメがたいそう好きな方で、難解なダンジョンを作っては、来た道すらわからずぐるぐると迷い続ける勇者を見て楽しんでいらっしやいました。

それから美しいものが大好きなお方で、どこぞの国に見目麗しい姫君がいるという噂を聞けば、浚ってきてご自分の花嫁になさるうとする程。

あのお方は、たいへん魔王様らしい魔王様でいらっしやいました。そこをいくと、当代魔王様はなんとも魔王様らしからぬ振る舞いをなさる方であると言えましょう。

あのお方は、今までのどんな魔王様とも違う、とても不思議な魔王様でございます。

「と、とにもかくにも！我ら人間への非道の数々！許すまじ！」

「非道の数々つて・・・まだ魔王就任一ヶ月目ですが？」

「あの恐ろしいダンジョンは、お前たちが作ったのだろう！」

「あー、あれね！」

「そのとおり！あのすばらしいダンジョンは、魔王様が手ずからお創りになられたもの！」

「やはりか！我らに害為す存在め！」

「ええ〜。あのダンジョンは、ちゃんと子供からご老人まで楽しめるように作ってますよ。途中途中に回復アイテム設置してるし」

「あれほどお止めたにもかかわらず！魔王様、あなたというお方は！！カーッ！」

「（無視）それに、ゴールには賞品として”7泊9日の海外旅行ペアチケット”を用意してるし」

「いつのまに用意されたんですか、魔王様！！」

「ペアチケット！？なぜ魔王がそんなものを！！」

「他のダンジョン・・・前の魔王がつくったヤツは、センスないから壊しちゃったし」

「なんたる蛮行　　！！！！」

あまりの衝撃的事実に、フォルカー様が気絶されました。

19：魔王様と勇者 また会う日まで編

打ちひしがれた様子でその場に崩れ落ちた勇者・・・と、なぜかフォルカー様。

勇者の後ろでは、魔術師（男）・僧侶（女）が哀れみを帯びた瞳で勇者を励ましております。

フォルカー様の頭上では、魔王様がとくに悪びれた様子も無く、カラカラと愉快そうに笑っておられます。

「だってあのダンジョン、小難しい上に毒ガスとか溶岩とか、悪趣味ですからー」

「先代様のダンジョンが・・・よよよ」

「ほら！迷路はもつと面白いヤツじゃなきゃ！私が小さい頃は、よくヒマワリで作った迷路で遊んだものだよ！」

「ヒマワリで勇者が倒せますか！カーツ！」

「いや、そもそもなんで倒すこと前提なの？」

「勇者は天敵ですよ！？」

「でも私は争いごと嫌いだからねー。痛いのも怖いのもヤだ！」

というわけで勇者様

「ななななんだ！？（裏声）」

「（そんなに驚かなくても）・・・えー私は争いごと痛いのも、血を見るのもユウレイと遭遇するのも嫌いなので、人間の国に攻撃することはないからご安心を」

「まをうさまあぁ！！！」

「魔王じゃなくて”まをう”になってるよ、フォル」

「そんなことはどうでもよろしい！ 人間に屈服すると仰るか！？」

「違う違う。人間は人間で、私たちは私たちでのんびり暮らせばいいじゃんってこと。どっちが上とか、どっちが滅ぶとか、そんなの

「疲れるだけだから」

「ふん。魔王がよく言う」

「おやおや」

「魔王様！考えをお改め下さいませ！人間は我らの」

「フォル」

その瞬間、フォルカー様の顔色がさっと変わりました。魔王様の言葉ひとつで、あの上級魔力を持つフォルカー様ですら、捕食される側の弱き者のように声も出せず萎縮しております。

あのお方から発せられる強大な魔力は、ただそれだけで我々の心に畏怖の念を抱かせるのです。

「私は、誰が傷つくのも見たくない。私を”王”と崇める魔物も、私を”敵”と罵る人間も」

我らの王。

魔を統べる、絶対的な支配者。

でも誰よりもお優しいお心を持った、平和主義の魔王様。

「勇者様でしたら、戦意を持たぬ者とそれでもなお戦いたいなんて、まさか言わないでしょう？」

にっこりと花のように微笑んだ魔王様は、最後にこう仰りました。

「私の名前はリョーコ・サトウ。この名前をキッチリ覚えて、また遊びにきてね」

第1192代 リョーコ・サトウ魔王様。

この日を境に、その御名前が世界に知れ渡りました。

20：勇者様と新米魔王様

夏の空はどこまでも青く、その美しい碧空を映すかのように、海もまた青かった。

ゆるやかに進む船の上では、船員の談笑と、波の音と、心地よい潮風が通り抜けていく。

もうだいぶ離れてしまったから、港で最後まで手を振っていた人物の姿は、もはや肉眼では確認できない。勇者は青空に囲まれるようにしてそこにある、この世で最も邪悪なモノが住んでいると言われている大陸を、複雑な思いで眺めていた。

邪悪なモノだったはずだ、魔王とその配下どもは。

なのに、あれはどういうことだろうか。

私は、誰が傷つくのも見たくない。私を”王”と崇める魔物も、私を”敵”と罵る人間も。

この世で最も忌むべき存在で、残虐非道の限りを尽くしてきた者たちだったはずだ。

魔王はその筆頭だ。故にあれは毘だと考えるのが妥当だ。

だが。

あの目は嘘をつく者のそれではなかった。今まで何人もそういう人間を見てきたが、あの魔王は嘘をついていなかった。ひたすら真摯で、まっすぐだった。

魔王なのに。魔物の王であり、人間にとって最も憎い存在であるはずなのに。

「おかしい魔王だ」

どこか憎めない魔王だった。

今まで見たことのないくらい、深い黒を宿す髪と瞳。その長い髪を

なびかせて、瞳を細めて笑ったのだ。まるで聖女のように。

おそらく、自分など一瞬で消滅させてしまえるだけの魔力を有しているはずなのに、それをせず「また遊びに来い」と言う。

「ふん。魔王のくせに」

「ジーク様、なにか言いましたか？」

魔術で風を操りながら、シヨーン　ともに魔大陸に上陸した魔

術師だ　がたずねた。どうやら風に紛れたと思っていた私の独

り言が聞こえたようだ。

「いいや。なにも」

「そうですね。．．．いや、それにしても、変な魔王でしたね」

「お前もそう思うか？」

「はい。だいたい、あんなバカでかい魔力を持ちながら、攻撃ひとつしてきませんでしたからね」

「もしそうなら全滅だったろうな」

「確実に。船諸共。というか、普通なら港にたどり着くまでに一戦くらいありますよ。それもないところをみると、本当に争いごとが嫌いなかもしれませんね。まあ畏かもしれませんが」

「そうかもな」

「陛下に、どのように報告します？」

「そうだな．．．まあ父上には”ヒマワリ迷路のようなダンジョンを目指し、モンスターと漫才をするような、平和主義の新米魔王”とでも報告するか」

「いや、それは少々問題あると思いますよ」

「他にどう言えと？あの変な魔王を？」

おそらく、歴代の魔王の中でも、とびきり不思議な存在だろう。

それ故、まだまだ未知の部分が多い。

本当に争いを嫌っているのか、それとも畏か。

今後のモンスターの動向もわからない。

「なんとも形容しがたい魔王でしたからねえ。まあ見た目はけっこうかわいかったです」

「おい、女好きも大概にしておけよ。また痛い目みるぞ」
「ひどいですよ、ジーク様」

何にせよ、まだあの魔王のことはわからないのだ。
だったら仕方ない。

「遊びにでも行くか」

あの新米魔王をたずねて。

何故かわからないが、きつとあの魔王なら笑顔で出迎えてくれるよ
うな気がした。

20：勇者様と新米魔王様（後書き）

勇者視点のお話。

次回はきつと、魔王様がまた大暴れ。

あれ？そついえば僧侶（女）が出てない（OUCH!）

21：ケルベロスと魔王様

ドラゴン（兄）の背中の上、恐れ多くも魔王様の腕に抱えられながら、私はそつとそのお顔を見上げました。魔王様は、それは楽しそうに微笑まれてらっしゃるので、自然と私も楽しくなりました。

「ケロ？どうしたの？」

魔王様が楽しそうなので私も楽しくなりました。

そう申し上げたら、魔王様はますます艶やかに微笑まれました。

「そう。ケロも楽しいんだね」

魔王様がお幸せでしたら、私もまた幸せでございます。

「ケロは、勇者がキライじゃないの？」

魔王様のキライなもの、私のキライなものでございます。

「あれま。じゃあ、ケロもユーレイがキライなんだね」

私は平気です。

「おや？」

なれば、魔王様をお守りすることもできましょう。

「うん。そうだね」

貴方様がお好きなものは、私の好きなものでございます。

貴方様が憎いと思えば、私がすべて喰らってさしあげましょう。

21：ケルベロスと魔王様（後書き）

魔王様が好きな物は好き。

嫌いな物は存在を抹消しちゃう。

ちよつと歪んだ愛。

愛らしい外見に惑わされてはいけません。

22：フォルカーと魔王様

まったくもって、信じ難いことでございます。

こともあろうに勇者どもを生かしておくなど！まして、無事に人間の国へ送り届けると仰るか！！

私には、魔王様のお考えが理解できません。長きに渡り対立してきた人間と仲良くせよと・・・そう仰せになる、あの方のお考えが。

「機嫌直してよ、フォル」

玉座で膝を抱えてお座りになる魔王様は、眉尻を下げて「フォル」と、寂しそうに私の名をお呼びになった。

いつも通りでございますと告げたら、「いつもより素っ気無い」と仰って、あらゆる者の心の内を見透かしてしまいそうな、あの曇り無き漆黒の双瞳そうごうに私をお写しわたくしになられました。

「そんなに、人間がキライ？」

「当然でございます。無抵抗の私の部下を、どれほど殺されましたか。残虐という言葉は、人間にこそ相応しい。そう思われませんか？」

「・・・そうだね。ときに人は、酷いことするからね」

そう仰って、魔王様はますます寂しそうに微笑まれました。

「でも優しいよ。人も。毎日美味しいお菓子ときれいな花をくれた、フォルのように」

小さなお体をさらに小さくさせて、魔王様は玉座の上でカスミソウの様に控えめに微笑まれました。

「・・・あの頃は、まだ魔王様がこちらに慣れてらっしゃらなかったのです、少しでもお慰みになればと」

「うん。嬉しかったよ」

「光栄でございます」

「うん。だから、人の良いところも探してみて」

「・・・魔王様。前後の会話が噛み合っていないませんか？」

「うん。私も、何が言いたいのかわからなくなってきた」

へらつと頬を緩ませて、魔王様は玉座からお降りになりました。

「気が向いたら、やってみて。良いところ探し」

「気が向いたらで、ございますか」

「うん。　　ねえフォル。今日はこれから、中断していたお城探

検しよ？」

勇者一行が攻め込んできたからすっかり忘れていましたが、そういえば魔王様にお城のご案内をする予定でございました。

「そうですね。それでは、ご案内致しましょう」

「よろすくー」

屈託無く笑うそのお姿に、本当によくお笑いになる方だと、こちらも自然と笑みが零れます。

恐怖で支配なさっていた先代様とは大違いだ。

「アヒルー 隊長ー」

「まだそのネタを引っ張るおつもりですか！カーッ！」

「ぶはっ！」

私は、いまだ貴方様のお考えには賛同しかねますが。

貴方様の春の日差しのようなあたたかな笑顔が、人と争うことで曇ってしまつくらいなら・・・

それなら私は、貴方様の仰る”人の良いところ”を探すよう、善処
しましよう。

22：フォルカーと魔王様（後書き）

何だかんだで魔王様大好きなの、ツンデレ。

とっても強い魔物なのに、魔王様が来てから威厳がなくなってきた
ようです。

ここらでちよいとご紹介します。

あつてもなくても、どっちでも良いかもしれない。
そんな紹介ページ。

佐東良子^{さとうりょうこ}：異世界から召喚された、1192代目魔王様。初期装備は茶碗とお箸。

フォルカー：魔王様の右腕的存在。怒ると語尾に「カーツ」とつく。

ケルベロス：愛らしい柴犬の外見だが、魔獣。おつきくなることができる。

ドラゴン兄弟：二丁目の空き地に住んでいます。

ポチ：ひよこ族の族長。語尾にワンとつきます。

ジークフリート（ジーク）：魔王様就任後初めて攻めてきた勇者（男）。そしてとある国の王子様。

シヨーン：魔王様就任後初めて攻めてきた魔術師（男）。ジークの友人。

名前だけ

ベルンハルト・ディートリッヒ：ワイゲルト国の王様。人間。

ルデイ・バルヒエツト：先代魔王様。ということは1191代目魔王。

名物

ホタルイカ：魔大陸一有名な海産物。イカの中の王様。発光する。

こちらでよいとご紹介します。(後書き)

以前投稿していた紹介ページに、勇者一行を追加したものです。

23：魔王様と將軍

先の勇者騒動で、魔王様はひとつ疑問に思われたことがあるらしいのですが。

「ねえフォル。」

「いかなさいましたか？」

「この国って、軍とか將軍とか」

「ヒッ！！」

「ど、どしたのフォル？そんな、初めて納豆を食べた外国人のような顔して！？」

「魔王様。例えが微妙かと」

「ケロ！フォルが変顔になった！」

「それはフォルカー様にとって將軍が・・・いえ、説明するよりご覧になった方がよろしいかと」

「ケルベロス！余計なこと」

「それでは魔王様。”ギャツラルブルーの監視役”のモーズグズ將軍をお呼びします」

「え？ギャ、なに？」

「すぐにわかります」

フォルカー様がまだ何か仰っていました。私は構わず、執務室の窓から身を乗り出して咆哮しました。地響きのような我が咆哮は、大陸の端にまで届くかというほど響き渡り、風を切りながらしばし木霊しておりました。

ややあつて、一羽の優美な鳥が、窓からするりと入り込んできました。

炎のように紅い緋色の羽に、ラピスラズリの群青を宿す瞳。鷺ワシのように威風堂々、獲物の体に食らいつく鋭利な爪。数多の猛禽類もっぎんるい

を束ねるに相応しい風格を備え持つ、一羽の火の鳥でございます。

「お呼びでございますか。魔王様」

ギョッラルブルーの監視役”のモーズグズ將軍は、恭しく頭を垂れました。

23：魔王様と将軍（後書き）

少々変更しました。

内容はそれほど変わっていませんが、ちょっとおかしいところがありましたので、そのあたりを直しました。

誤字・脱字など、何かおかしいところがありましたら、ぜひご報告ください。未熟者ですが、これからもよろしく願います。

24：魔王様と将軍 監視編

美しい火の鳥は、瞬きひとつの間に人の形へと姿を変えました。

短く切り揃えられた真紅の髪、群青色の武人らしい鋭い瞳。細身でありながら、一度武器を手にすると一騎当千の活躍をなさる鍛えられた四肢。

すらりとした長身の、妙齡の美女。

ギャツラルブルーの監視役、モーズグズ将軍閣下でございます。

「モーズグズでございます。以後お見知りおきを」

「はじめまして。魔王のリョーコです。でもどうして、ひと月もここで生活してるのに、会うのは初めてなんでしょうね？」

「それは私が、ギョツル川の警護を任されているからでございます」

「川？お城の先の、あの大きな？」

「はい。その川に架かる唯一の橋・ギャツラルブルーを監視しております」

「魔王様。ギャツラルブルーはここへの唯一の道でもありますので、この大陸で二番目の實力をお持ちのモーズグズ将軍が、その任に就かれています」

「ものすごい美女なのに、それでいて実力ナンバー2だなんて！まさに女性の憧れ！」

「恐縮でございます」

「あれ？ナンバー1ってもしかしてもしかすると・・・」

「はい。フォルカー様でございます」

「まじで？（あれでナンバー1？）」

「いずれ引きずり下ろしてくれます、あんな男」

不敵に微笑むモーズグズ将軍。

を、見て怯える魔王様。

「・・・ケロ。美女が笑うと、迫力あるね（ぶるぶる）」

「はい。恥ずかしながら、私の尻尾も少々元気がなくなりました」

「ところで魔王様」

「うわい！（びくっ）」

「何かお困りのことはございませんか？あの男は小姑みたいに口煩い割りに、変なところで気が回らないというか、使えないというか、むしろ変態というか」

「（変態って）・・・と、とりあえず大丈夫」

「あの男は、歴代の魔王様の中でも最強の貴方様にすっかりご執心故、ただでさえ締りの無い顔がさらに締りが無くなって頭の中も緩みきっている様子。そんな男に魔王様の補佐を任せるのは甚だ不安ではございますが、私もギャツラルブルーを離れられぬ身・・・もしも何か不都合がございましたら、すぐにお呼び下さい。いついかなる時でも駆けつけます」

「あ・・・ありがとうございます」

「あの男が不貞を働いた時は、一瞬で仕留めましょう」

「し、仕留め・・・」

「おまかせください」

將軍閣下は、まるで高貴なバラの花の様に美しく微笑まれました。それを見た、大陸ナンバー1の実力者殿は、部屋の隅でぶるぶると震えていらっしやいました。

24：魔王様と將軍 監視編（後書き）

フォルカーが最後の一文でしかでてきてませんね。
ナンバーワンなのに。

25：魔王様と将軍 美意識編

突然ですが、またもや勇者が攻めてきました。

此度の勇者はなかなか腕の立つ者のようで、隙が無く、常に我々の一挙一動を監視しております。其の者もそれなりに修羅場をくぐってきた者たちばかりで、けっこうな力をもった魔術師も中にはいるようでございます。他にも屈強な兵士や、経験を積んだ僧侶も多数おります。

前回の勇者一行とは違い、経験値も実力もはるかに勝った一行ではございますが……

「なんだ貴様ら。かようにみすばらしい姿で、魔王様にお会いできると思っているのか。身の程を知るがいい、愚か者どもが」

「ふん。我らを見かけで判断するとは。モースグズとやら、そなたも大したことないな」

「大いに関係ある。美しい心は、美しい生活からと言うのではないか。よって、魔王様の軍を預かる者として、お前たちのような見た目の貧しい子どもが魔王様の視界に入るとは、断じて許さん！」

「み、見た目は関係なかつ！！」

「馬鹿か貴様。お前のように油の浮いた顔を、誰が好き好んで見たいと思う？ 生え際も危ない上に、なにやらオッサン臭い。お前、居酒屋で出されたお絞りで、顔を拭く性質だろう？」

「な、なぜそれを！！？」

「やはりか……。休日になると、家族に邪魔者扱いされているな？」

「ぐっ！」

「娘に”お父さんのパンツと一緒に洗わないで！”と言われているかな？」

「ぐはっ！……（吐血）」

「貴様のような中年勇者、断じて認めん！魔王様のお美しい漆黒の瞳が穢れるわ！！」

「け、穢れるとはなんだ！中年を馬鹿にするな！」

「あと20歳若返ってから出直して来い！！」

「あんまりだぁー！！（号泣）」

一部始終をドラゴン（兄）の背中の上でご覧になっていた魔王様は、搾り出すようにこっぴど仰いました。

「……情け容赦無え」

モーズグズ將軍の言葉攻めで、（中年）勇者一行が尻尾を巻いて逃げていきました。

26：魔王様と將軍 鳥蛇編

魔王様は、第213代魔王様がお書きになった『金時拾遺物語』をお読みになりながら、本日のおやつのレストランを、紅茶と一緒にパリパリとお召し上がりになっています。

しかし集中してお読みになれないのか、ページを捲る回数よりも、顔をお上げになって執務室の扉を見る回数の方が多いくらいでございます。

正確には、扉の前の二人 小一時間も低レベルな口喧嘩をなさっている、フォルカー様とモーズグズ様でございます。

「ところで、あの二人はいつまで放置しておけばいい？」

「私が追い出しましょうか？」

「・・・いや、大丈夫（ていうかケロの上司じゃなかった？）」

「あのお二人の家系は、前の前の、ずっと前の代からあのように仲が悪うございます」

「あ・・・まさに犬猿の仲」

「いえ、鳥蛇の仲でございます」

「と、とりへび？」

「はい。あのお二人のご先祖様の仲の悪さが謂れいわとなっております」

「鳥はモーズグズとして、じゃあ蛇って」

「フォルカー様の本来のお姿は、大蛇でございます」

「マジでか・・・」

「さつさと冬眠したらどうだ、フォルカー？」

「今は夏真っ盛りです！カーッ！」

「なに。お前がいなくとも、私が魔王様をしつかりお守りする故、安心して穴倉に引つ込め」

「黙れ、鳥！！」

「・・・子供だ。おつきい子供が二人もおる」

「魔王様。あのお二人はいかがなさいますか？」

「うむ。保護者として、しっかり叱っておかねば」

そうして魔王様は、大きく深呼吸をなさって

「じゃかしいわー！！（訳：うるさい）」

魔王様の強大な魔力で、フォルカー様とモーグズ様が扉とともに吹っ飛びました。

27：魔王様と金銀財宝

魔王様はいま、こちらの貨幣制度を聞いておられます。

人間の世界には金貨、銀貨、銅貨がございまして、この順番がそのまま、貨幣価値の高い順となっております。

魔大陸では通貨ではなく宝石が用いられ、何かを購入する際は商品と宝石を交換しております。

フォルカー様が用意された人間のお金と、いくつかの宝石を眺めながら、魔王様はこう仰られました。

「モンスターを倒すと、お腹からお金が出てくるって本当？」

「出ませんっ！！！」

魔王様。ゲームのやりすぎです。

28：魔王様と魔法の訓練

ここ数日で、すっかり魔法の鏡を使いこなせるようになられた魔王様が、他の魔法も使ってみたいと仰られました。

現在、魔法研究家のフェンリルが、魔法について魔王様にお教えしているところでございます。

彼は私のおよそ3倍の体長で、銀色の毛並みを持つ狼でございます。

「魔法を使うには、強く念じることが大切だ」

「フェンリル。お前、魔王様に対してその口の利き方はなんだ。無礼にもほどがあるぞ。喰い殺されたいか」

「まあまあ、ケロ。私は気にしないよ」

「だそうだ、ケルベロス。部外者は引っ込んでろ。シッシッ」

「で、どこまで話したかな？　そうそう。たとえば魔法で火を

おこす場合、どのような形状で、どのくらいの規模の火をおこすか、頭の中で完成予想図を描くんだ」

「完成予想図か！なるほど！じゃあ《いでよ炎》！」

「つて、えええ！？（いきなり！）」

「さすがは魔王様・・・」

「やたー！出た出た！まさにゲームみたいな火炎魔法！」

「失礼致します、魔王様。魔法について学ばれているとのことでしたので、魔石をお持ち」

「うああ！フォルカー様に飛び火したー！」

「フォルカー様！フードが燃えております！」

「まをうさまああ！カーツ！」

屋内での訓練は、二度と行いません。

29：魔王様とお客様

突然ですが、勇者が遊びに来ました。

以前、勇者（男）と魔術師（男）と僧侶（女）の三人だけでやってきた、あの一行でございます。

今回は勇者と魔術師の二人だけのようでございます。

勇者の方を、名はジークフリート。魔術師はシヨーンと名乗っております。

「今日はよく来てくれた！魔王就任後、初めてのお客様だよ！」

「魔王様！勇者を魔王城に招くとは、いったいど」

「（無視）いや、あれからひと月も音沙汰なしだったから、もう来てくれないのかと思ってた！」

「・・・おい。無視してよかったのか？あの男、まだ何か言ってるぞ？」

「ああ、いいの。気にしないで。”魔大陸の小姑娘”の異名を持つ男だから、小言が多いの」

「まをうさまああ！カーツ！」

「・・・（小姑娘）」

「（魔物が小姑って）」

「さあ召し上げられ！二人のために、がんばって作ったんだよ！」

「魔王が！？まさか毒入りか！！？」

「おう！死ぬほど美味いぞ！（エヘン）」

「あー・・・ジーク様。たぶん、疑うだけ無駄だと思いますよ」

「・・・何故だ。この魔王に、魔王としての常識は当てはまらないのか？（脱力）」

「フツウ、そこは毒入りがきますよね？」

「フツウはな」

「さあさあ！いっぱい食べてね！」

心中複雑な勇者共でしたが、ちゃっかりおかわりをしていました。

30：魔王様とお客様 フォルカーの苦悩編

それから勇者どもは、三日ほど滞在して魔王城を発ちました。
勇者と魔王。

本来であれば相反する存在が、信じがたいことに同じ食卓につき、あまつさえ世間話に花を咲かせる始末。前代未聞を通り越して、もはやこれは夢であると。そう思いたい心境を、どうぞお察しく下さい。

「いや〜楽しかった！ね？フォルカー？」

「それはようございました・・・（ぐつたり）」

「あのふたりも楽しんでくれたみたいだし！料理も評判よかったし！」

「確かに、魔王様がお作りになったものは、どれもとても美味しゅうございました」

とくに、私は”ぱすた”が好きです。

そうお伝えしたら、魔王様はそれは嬉しそうに微笑まれました。

ああ、まったく。

私は、このお方のこの笑顔に弱いのだと。

まだ数ヶ月しかお仕えていないのに、魔王様への己の心酔ぶりに驚きを隠せません。

「・・・勇者どもと仲良くなさることに關しては、もはや何も申しません。ですが、御身が我らの主であることを、どうぞお忘れなく」

つまり、どれだけ魔王様が平和主義であろうと、世間的には魔王様は魔王であり、そして勇者は人間なのです。

相容れない存在。

それが、人間にも魔物にも、深く根付いている”事実”なのです。

「まあ確かに、私はみんなの魔王様だけど・・・向こうの世界では、ごくごくフツウの、ただの学生だったんだよ。”みんなで楽しく！バカみたいに笑って生きる！”がモットーだったんだよ」

「こちらと向こうでは、状況が違います」

「状況は違うけど、いまさら生き方は変えられないからなー」

「・・・私は、ただ心配なのです。親しげに近づいて、魔王様のお命を狙う輩が現れるのではないかと、と」

「だいじょーぶ。だいじょーぶ。私は能天気だけど、愚鈍ではないと自負してるよ」

まあ見ててよ、と。魔王様は得意げに胸を張って。

「何があるうと、私は私の生き方を貫いてやる」

どうやら私の苦悩は、これから先、まだまだ続くようでございます。

31：魔王

世界の東の、さらに東。

そこに小さな大陸がありました。

人が侵せぬ領域。魔物の住まう大陸。

人はその地を”魔大陸”と呼んでいました。

魔大陸には、人間の国のように王様がいました。

名を、リョーコ・サトウといい、珍しい漆黒の瞳とぬばたまの髪を持つ、少女のような魔王でした。

彼女は1192番目の魔王で、魔王の中でも一番強い魔力を持つ王でした。

けれども彼女は、とても不思議な魔王でもありません。

争いを嫌い、そして愛を信じていました。

彼女の笑顔は、春の日差しのように暖かく柔らかな微笑みでした。

魔王を倒しに行ったはずの勇者も、その微笑を前に、戦意を喪失したそうです。

そんな勇者に、魔王は笑顔でこう言いました。

また遊びにきてね。

こうして、歴代の中でも最強と謳われた1192代目の魔王は、初めて人間と”友達”になりました。

31：魔王（後書き）

次から第二部のなお話がスタートします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8180u/>

タダの魔王様

2011年9月30日14時08分発行